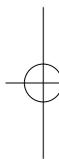


いるか句会へようこそ！

恋の句を捧げる杏の物語

装丁
イラスト

仁木 順平
ビブオ



目次

プロローグ	四月・春の夜のジュレ	5
第一章	五月・修司忌のかもめ	9
第二章	六月・カタツムリオトコ	57
第三章	七月・きつかけはハンカチ	75
第四章	八月・夜店の燃えさうな	105
第五章	九月・言葉放すこと	123
第六章	十月・愛鷹が露払ひして	143
第七章	十一月・この出逢ひこそ	171
第八章	十二月・君を追ふ聖夜	205
第九章	一月・バス待つところ	213
第十章		229
エピローグ		263
あとがき		
本文内引用句及び実作者名		

プロローグ



服を散らかした自分の部屋でわたしは鏡の前に立っては、身なりを確認していた。

きょうは初めての句会……なんだけど、句会って何を着ていけばいいんだろう。わたしは散々悩んだ挙げ句、最近お気に入りの花柄がらのワンピースに決めた。

ひざ丈の裾はふんわり広がっていて、春らしい軽やかさがお気に入りのポイントだ。鏡を覗き込むと、大学生のわりに少し幼い顔をした自分が映る。よく童顔って言われるけど、それは幼いころから変わらないショートの髪型のせいかもしれない。

高校時代に何度か髪を伸ばそうと思ったときもあつたけど、部活のときに邪魔になるので思い切れず、担当の美容師さんにも「前と同じ感じで」としかお願いしたことがなかった。

それにしても、句会ってどんな感じなんだろう……楽しみではあるけど、正直ちょっと緊張する……。

すると、玄関のほうでわたしを呼ぶ母の声が聞こえてきたので、薄いピンクのカーディガンを急いで羽織ると慌てて部屋を出た。

マンションの玄関を出て母の後ろを付いていきながら、わたしは二回続けて大きなくしゃみをした。マスクがはじけ飛びそうな勢いだ。

「杏、大丈夫？」

「大丈夫じゃない。だから、嫌だったんだよ、こんな風の強い日は花粉ハンパないんだから。花粉症じゃないお母さんにはわかんないよ」

もう一つくしゃみをして、母の臍月さつきをにらんだ。

「でも、句会にイケメンがいるって言ったら急に行く気になったじゃない」

「なっていないよ」

「じゃあ、俳句に興味があったんだ？」

「俳句なんて、別に……」

そもそも俳句って言われても、芭蕉のイメージしか浮かんでこないし、五七五で季語を入れればいいぐらいしかわかんないよ。

母から眼をそらせたわたしは、四月の空を見上げた。

自分なりにちよつと気合いを入れてオシャレしてみたけど、ほんとになんでもきょうお母さんの誘いに乗っちゃったんだろうとすでに後悔しつつあった。そりゃあ、ちよつとイケメンは見てみたかったけど……でも、普通に考えるとお年寄りが集まる句会なんかで恋がはじまるわけがないし、特に俳句にも興味ないし。

わたしは花粉でむずむずする鼻をすすり上げた。

それにしても、と思う。

いるか句会ってちよつとかわいい名前だな。

なんで、いるか句会なんだろう。もしかして、参加者はみんないるか好きだったりして？

わたしはいるかが大好きだ。いるかと一緒に泳ぐツアーがあるみたいだけど、いつか行ってみたいと思う。ぜったい気持ちいいに決まっている。

でも、きょうは違う。いるかに会いに行くんじゃない。参加者が自分で作った俳句を持ち寄って催す句会という場なんだと改めて考えてみると、また少し憂鬱になってきた。お母さんは楽しいって言うけど、いったいどんなふうにやるんだろう？ わたしみたいなのが行ってほんとにいいのかな……。

母の楽しそうな背中を見ながら、わたしは足どり重く会場に向かった。

第一章

四月・春の夜のジュレ



荻窪駅から十分くらい歩いたところに、K庭園はあった。

庭園には桜が咲いていた。まだ幹の細い桜だったが、強い風に吹かれながら、花を散らすま
いと一生懸命咲いているようにわたしには見えた。

頑張つて受験をくぐり抜け大学に入学してもう二年生になったものの、今ひとつやりたいこ
とが見つからず、勉強にも集中できない中途半端な自分を省かえりみた。

わたしの大学生活にもこの桜みたいにもつと綺麗な花を咲かせないと。

「あなた、何ボーっとしてんの？」

「してないよ」

「あ、さては桜で一句作つてたな？」

それを無視して、わたしは母を追い越すと庭園に隣接している建物の玄関に入つていった。

「いるか句会かい？」

「えっ、はい」

「ほお、これはこれは。句会にまた若い子が増えるんやなあ。わしは森之内ばいじん梅天や。よろしゅうな」

「はい。山下です。よろしく願います」

わたしは緊張して、先に会場に入つてゆくおじいちゃんの背中を見送つた。

バイトンつて……時代劇に出てきそうなすごい名前。やつばお母さん、わたしをハメたんだよ。俳句なんてあんなおじいちゃんばかりじゃない。

帰ろう、今からでも遅くはない。

「ちよつと、杏、また靴履いてどこ行くの」

「帰る」

「ここまで来て?」

「今さつき、おじいさんにあつたよ、いるか句会の」

「梅天さんね。やつぱり、あんたのお目当てはイケメンか」

母はニンマリ笑う。

「……帰る」

「いいから来なさい。若い男の人もちやんといるから」

あらがったが、ニヤニヤ笑う母になかば強引にまた靴を脱がされて、わたしは引つ張られるように会場に入つていった。

会場の入口で「わかったから、離してよ」と母に囁きかけた。

母はしてやったりという顔つきをして、さっさと席に座る。母はとなりの席をぼんぼんと叩いて、座るよう促した。

見渡すと、もうみんな席にしているような雰囲気だ。

母がいそいそとスタツフらしき人に、句会の会費を支払っている。

わたしは席に着いてから恥ずかしくて、ずっと顔を上げられなかった。

「さて、あと一名、もう少し遅れるそうなのでそろそろ句会をはじめたいと思います」
たぶん先生の声だろう。思っていたより、若い。

ちらつと顔を上げて、声のほうを見た。

「きょうは、初参加の人もいるので句会はゆつくりと説明しながら進めたいと思います。その前にそれぞれ自己紹介をお願いします」

自己紹介と聞いて、また慌てて下を向いた。

とにかく先生は思っていたよりも若いので少し安心した。

三十代後半くらいかな。芭蕉みたいな変な帽子もかぶっていない。着物でもないし、杖もついていない。仙人みたいな長いひげもない。

むしろコーデウイのシャツをオシャレに着こなしている。目鼻立ちのはつきりした顔つきの先生は穏やかな雰囲気だけど、意志の強そうな眼をしている。なんだか大人の包容力があり

そうだ。ドラマだったら、頼れる上司が正義感溢れる刑事役つてとこかな。でも、恋人候補としては、わたしにはちよつと年上すぎる。

あれ、やっぱりわたしはイケメン目当てで、ノコノコと句会まで足を運んでしまったのか。無念……わたしは自分の浅はかさを悔いた。

「では、梅天さんからお願います」

「森之内梅天です。たぶんこの句会では最年長やと思います。句歴はざつと五十年ちゅうところかな。ちようど東京オリンピックのとき、どんどん変わっていく東京を写真を撮るように俳句にして記録したいと思ったのがきっかけです。そのとき、俳句は日記にもなるんやなと気づきました。下手な日記よりも自分の気持ちが高く込められるもんやとも思います。余生は俳句に捧げるつもりです。改めてよろしゅうな、さつきのお嬢ちゃん」

さつきのお嬢ちゃんの言葉でビクツとなり、梅天さんのほうをちよつと見た。立派なあごひげをたくわえた梅天さんが満面の笑顔でわたしを見ている。笑顔になると、両目が無くなるくらい細くなるんだ。妙なところに感心してしまい、慌てて苦笑いを返してまた下を向いた。

「奥泉エリカです。いるか句会に来てちようど一年目です。こんなに続くとは思わなかった。自分でもびつくりしてます。あたしの勤めるお店に俳句好きの社長さんが飲みに来られて、いろいろ話を聞いていうちに、自分でも作ってみようかなって思いました。それでネットで俳句のことを検索してたら、いるか句会を見つけたので思い切つて飛び込んでみました。

よろしくお願いしま〜す」

わたしはまた顔を上げる。

パーマロングのエリカさん、外国のモデルみたいな顔立ちの美人さんだけど、ちょっと派手だな。今の話に出てきた、お店？ 社長？ 飲み？ って単語から推測するとキャバクラ嬢か。胸元開けちゃってる感じなんか、ドラマなら犯罪組織のボスの愛人役にぴったりかも。外見からはとても俳句なんてやっているようには見えない。

エリカさんのほうから、香水のいい香りがかすかに漂ってくる。マスクを外したので、よけいに鼻がむずむずした。

「ええ、鈴木賜仁と申します。本宮先生の句会に来て二年目でございます。本宮先生が選者をされている雑誌の投句コーナーに応募して入選したのがきっかけで句会にも参加させていたたくようになりました。最初はインターネットでたくさんの人が俳句を作っているのを見て、こんなに気軽に俳句を作っているのかと刺激を受けたのが興味のはじまりでございます。私もこんな句会に熱中するとはつゆほども思いませんでした。普段は銀行員をやっております。銀行とはまるで違う世界なので、句会はまことに大事な気分転換にもなっております。皆さま、どうぞ、何卒よろしくお願い申し上げます」

賜仁さん、カタイ。絵に描いたような七三分けの銀行員っていまだにいるんだ。火曜サスペンスだと、冒頭五分で殺されちゃう被害者役……って、かなり失礼な妄想してるな、わたし。

でも、どんな俳句を作るんだろう。

なんて、勝手に句会の人たちでドラマの配役を考えてたら、次は母の番だ。ちゃんと話せるのかな、この人は。

「山下臯月でございます。専業主婦のかたわら、毎日俳句を作る時間を一時間でも持とうと心がけております。俳句は洗い物をしながら、料理をしながらでも考えられるのでいいですね。私は俳句歴三年ですが、句会デビューして、一年とちよつとです。何気なくテレビの俳句番組を見ていて、五七五でこんなに短いなら私でも作れるかしらと思つてはじめました。まだまだ勉強不足ですので、よろしくご指導くださいませ。きょうは、娘を連れてきました。なんでも、イケメ……」

わたしは母のくるぶしの辺りを蹴った。

「痛っ。ちよつと」

と、言いかけた母をさえぎるようにして、

「娘の山下杏です。母に連れられてきました。きょうは……」

そのとき、会場のドアが開いた。

「すみません。遅れてしまいました」

「あつ、^{すはら}昴さん、間に合つてよかったです。どうぞ空いている席にお座りください」
先生が微笑んで席を勧める。

立ち上がって自己紹介していたわたしの眼は、昴さんの眼とともに合った。
昴さんは申し訳ないという表情をして、頭を下げた。

わたしも頭を下げる。

ギター！ イケメン！ 背が高くてスタイルもいい。句会のメンバーでドラマを作るなら、
主役はこの人以外ないね。わたしは心のなかで喝采した。

「杏さん、途中ですみません。続きをお願いします」

先生が自己紹介を促す。

「はいっ」

わたしは声が一オクターブ上がっていることを隠せなかった。

「えっと、となりにいる母に連れられてきたんですけど、母が楽しそうにペンと手帖を持って
俳句を作っているのを見て、ちょっと自分もやってみようかなと思いました。いるか句会の名
前にも惹かれました。俳句は全くの初心者です。よろしくお願いします」

深くお辞儀をして席に座った。

隣をちらっと見ると、昴さんとまた眼が合った。

昴さんの顔は小さくて、鼻筋がしゅっと通っている。一見クールな印象なのに、眼が合つて
微笑む昴さんの表情はほんわかと優しい。笑うと瞳まで穏やかな色を浮かべる昴さんを見てい
ると、わたしの両頬に熱が集まってくるようだった。

わたしは恥ずかしくなって、眼をそらせた。

「お嬢ちゃん、皐月さんの娘さんやったんやね？ コリヤコリヤ」

梅天さんがワントンポ遅れて驚く。コリヤコリヤという間の抜けた梅天さんの反応に、みんなが和やかに笑った。

「では、昴さん、駆けつけで悪いですが自己紹介を」

昴さんが立ち上がった。

「連城昴と申します。社会人一年目、俳句は高校生のころからはじめたので、八年目くらいです。広告代理店で営業をしています。コピーライター志望ですが、会社の規定で最低二年は営業部に在籍しないとイケないので、今いろいろと経験を積んでるところです。俳句はコピーを作るうえでも役立つと思いますので作り続けたいです。どうぞよろしくお願いします」

うん、声もちょうど良い高さで落ち着いた感じ。聞いてると、なんだか癒される。この声で名前を呼んでもらえたら、ときめいちゃうだろうな……。

「では、最後にすみれさん」

「はい。川本すみれです。文学部二年生で、寺山修司が好きで俳句をはじめました。小説や俳句を読むのが好きです。いるか句会に参加してきょうで六回目、ちょうど半年です。このちよつとした句会の緊張感もいいな思っています。よろしくお願いします」

すみれさんって、わたしと同じ年なんだ！ 理知的な眼差しとつやつやしたストレートロン

グヘアが綺麗で、すごく大人っぽい。年の近い女の子がいてよかったと、ほっと安堵の息がもれる。

「では、スタッフ、お願いします」

「本宮先生をサポートしています。白山土鳩です」

「同じく、廣田千梅ちづめです。句会の休憩にお出しするお菓子選びも担当しています。お菓子大臣です。よろしくお願いします」

お菓子大臣ってなんかカワイイ。甘いものに目がないわたしは、ちょっとテンションが上がる。

「では、僕も一応自己紹介を。本宮鮎彦もとみやあゆひこと申します。俳句をはじめたきっかけは、大学生のときに俳句サークルに入ったことです。最初は文章修行の一環としてはじめたのですが、しだいに俳句という韻文の世界にのめり込んでいきました。たった十七音で自然や人の心やさまざまな営み、そして宇宙まで詠よめることに俳句の魅力を感じました。いるか句会は、できるだけ初心者の方にもわかりやすく、堅苦しくない座にしたいと思っています。座とは句会の集まりのことです。俳句は、《座の文芸》とも言われています。一人で俳句を作り一人で新聞や雑誌に投句するのもいいですが、句会で自分の句を発表し、他人の句を鑑賞することで、より俳句の楽しみは広がるものです。句会という実践の場を通して、俳句の基本や僕が気づいたことをコメントしていきたいと思います。だから、杏さん、初めてでも心配ないですよ。さつき、杏さ

んがにいるか句会の名前に惹かれたと言いましたが、いるか好きなんですか？」

「あ、はい。いつか、いるかに乗って泳いでみたいです」

「城みちるやなあ」

「梅天さん、古くい」

エリカさんの素早いツツコミにみんなが笑う。

なかでも、銀行員・鵜仁さんのヒヤヒヤヒヤヒヤという引き笑いにギョツとなる。鵜仁さんの真面目なしゃべり方や様子とはすごく不釣り合いな、奇妙なトーンの笑い声だった。

「どうして、いるかっていう名前をつけたんですか？」

思い切って鮎彦先生に訊いてみた。

「僕もいるのが好きなんですよ。それで調べてみたら、いるかっていうのは群れで行動するんですね。群れで行動することで繁殖するときや捕食するときなど、環境的に有利らしいです。いるかは身体を触れ合わせたり、あの独特の高い声を出し合って、コミュニケーションを取るみたいですね。僕はそんないるかの群れのように俳句という大きな海を自由に泳ぎ回る集まりにしたかったので、いるか句会と名づけたんですよ」

わたしは大きく頷いて納得した。

隣の母も頷いている。

しかも、鮎彦先生のほうを見つめながら、眼を異常にキラキラさせているではないか。この



満面の笑み。ヤバい。

血は争えないものだな……。わたしは、母のいつもより念入りなメイクに改めて眼をやった。

いやいや、母の顔なんて見てる場合じゃない。これから、句会がスタートするんだ。